

## 討 議

### 「イヌ人に会う」と「人ヒトに会う」

結 城 錦 一  
Kinichi YUKI

応用心理学の機関誌に、狩野広之氏と斎藤幸一郎氏との間の科学方法論的な論争が掲出されることになったのは注目すべきことである。

どの学問にもあれ、それを裏づける科学方法論を欠いてはならないはずであるのに、近来の心理学領域では技術的論議があるばかりで、本来の意味での学問の基本的方法の反省と検討とは、全く省みられなくなっている。

狩野・斎藤両氏は自分の年期を入れたそれぞれの領域における苦悩をにじみ出させつつ、心理学者として見逃すことのできない問題の所在を指摘し、その際讚嘆すべき相手への礼節を尽しつつ、遠慮なき論争を展開している。我々は好感をもって成りゆきを注目しているところである。

○近来の心理学の基本的弊害は、行動主義者が憚ることなく口にするように、すべて刺激（物理的のものという）なるものから人間や生きもの一般を解してゆくところにある。

この行き方の結果、人間とは、寄せ算さえもなく出来ない計算器や、正しく物の映像の写らない困った写真器のような、とどのつまりでき損いの機械と理解されかけているに近い。

○斎藤氏の指摘によれば、臨床領域にもこの弊が及んでいるのらしい。我々の自在な常識では、人が人と会うこととは、そう簡単なできごとではない。人間と人間との出会いの深遠な意味については、古来語りつづけられている。机上の球が他の球に出会うのでさえも「場」の成立の御厄介になる。生きものの出会いは、球式の理解などではない。生きもの同士では、「イヌ人に会う」と、「人イヌに会う」とでは同じでないし、「人ヘビに会う」「人パンダに会う」における「人」はすべ

てを通じ同じ「人」ではなくなってしまうことまで起る。「人ヒトに会う」とは一層厄介であって、その人が一方は相談依頼人、他方の方が相談士であったとしたら、この両者の間にどんな複雑多岐な関係が成り立つか、想像を絶するものになろう。そんな場合に一方の「認識したままを鏡に映すごとく他方に示す」などということの効果を信仰させられるとすれば、これはコト重大であろう。またこのような複雑事態に、統計法が無反省に持ち込めると考えるならば、あまりにコトを単純に考えすぎているといい得よう。それに関する斎藤氏の指摘は首肯できるものである。

○こうした複雑事態をそのまま少しも殺さないで学問に取り入れなければ本当に役立つといわれる独立科学にならない心理学というものの難しさは、物理的科学におけるとは異なる方向と地点とで大きく蟠っているのである。近頃のようにひたすら物理学の方法や成果をそのまま借用して目先を弥縫し、物理学との間に根本的に介在する対象・方法・課題などの相違など考慮しようともしないのでは、そのため心理学をして人間理解に全く役に立たない奇異な学とさせてしまうのは必定である。

○しかしコト応用心理学に関しては、「役に立たない」ということは自殺的宣言になる。

基礎領域が自然科学のマネ事にうつつを抜かしすぎて人間を見失っている間に、応用心理学でこそは、人間を見つめ人間を学問的に捕えるように努めるべきであるし、またそうした機会は、応用領域においてこそ結論の社会的はねかえりの形で、しばしば与えられるものと思われる。いま上記の2人の研究者の学問的悩みと反省の展開に接し、この期待が根拠なきものでなかった感じである。